

この自分にとって二回の危機をなんとか乗り越えられたのは、家族をはじめ様々な方々の力があってだと思っているが、自分自身でいえば「今なら、もし、仮にうまくいかなくてもなんとか立ち直ることができるかもしれない。」という気になれる若さが何よりだと感じている。

その経験があつて、事務所を引き継いでもらうなら、後継者が若いうちになければならないという気持ちになつたのだ。ただ、そのことが、私自身の三度目の危機になろうとは思つてもいなかった。ちょうど友人のYが、長年の研究成果や取組実績を高く評価され、立て続けに名だたる賞を受賞され、書籍も発表されるなどしたことは本当に目出度くもあり、一方で、引退後の自分がないものであるのかを思つていた私には、正直、感慨深いものがあつた。

こうやつて振り返ると、人から認めて欲しいとか、社会的評価を気にして、引退後の自分を不安に思うのは、なんと不遜なことかと思ふが、そうだったのだからしょうがない。ひとは何をもつて生きていると実感できるのかと、哲学的な問いかけをしても答えを見出すほどの頭もなく、仏陀の悟りはなんだつたのかと本を何冊か目を通したが眠くなるばかり。そもそも仏陀が向き合つた苦悩は、生、病、老、死と根源的なもので、私が抱える苦悩とは次元が違つた。

そうこうしている時に手を差し伸べてくれたのが、この竹山の土地だつた。それは、当初思い描いてきた野遊びの楽しみが救つてくれたわけではない。もちろん、薪を無心に割つたり、土を耕したりするのは楽しく時間を忘れさせてくれたが、それらが心の不安を埋めてくれるほど簡単な話ではなかつた。

竹山の土地の何が私を救つたのかを説明するのは、なかなか難しい。まわりの草や木や鳥たちを見ているうちにそういう気になつたという説明になつていないが、手短かに言うとそういうことになる。

引退して竹山にいる時間が長くなつたことにより、夜明けから日が沈むまで、春から夏、秋、冬と同じ場所をじつと見続けることは、今までになかつた体験であつた。ずっとそこにあるように見える草や木も同じようにでいてそうではない。同じ夜明けでも昨日と同じではないし、春がやってきたといつても昨年の春とは異なる。竹山の小さな広がりであっても、そこにいる草や木や鳥たちは、常に流れる川のように同じようである変化をしていつている。新しく加わるものもあれば、いつの間にか姿が見えなくなっているものもある。それでも竹山の風景は変わらず目の前にある。

最初にこの土地を下見に来た時に、一本の木が目が止まつた。それは大きく折れ曲り幹だけが残つた枯れ木で、それを目にして荒れた土地だと思つた記憶がある。そして、土地を買い家を建てた翌年には、これも景色として面白いかもと切るのをやめる気になつた。それが三年目には、この老木は虫の住処を提供し、その虫をキツツキが探して木に穴をあけ、その穴にキノコが生え、菌の力で朽ちた木は地面に広がり土となる大きな自然の営みに気づいたのだ。そう、この世に意味のない存在はひとつも無いことをリアルに理解した瞬間だ。

